
ゼロの使い魔は3 番目

BLOOD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔は3番目

【Nコード】

N1412M

【作者名】

BLOOD

【あらすじ】

ネギま！の本編終了5年後にネギと友達になったフェイトが学園の見回りをしていると、突然鏡のような魔法陣が現れ使い魔として呼ばれてしまう！！

プロローグ1（前書き）

はじめまして作者のBLOODでございます。なにぶん処女作になりますので至らぬところが山ほどある駄文になりそうですがどうぞ長い目で見てやってください。

プロローグ1

ネギま！本編終了5年後・・・

フエイトside

ああ、相変わらず甘いな、ネギ君は、5年前は僕に友達になりたいだとか言ってきたし、今だって学園を襲撃してきた鬼に負けたガンドルとかいう魔法先生庇って怪我してるし、ああもうしょうがない、
「ネギ君下がって、ヴィシユタル・リシユタル・ヴァンゲイト 小さき王八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う毒の吐息を 石の息吹！！」

鬼を霧が包み、そこにはひとつの石像が出来上がっていた。フエイトは石像を殴り、石像を粉々にした。

「ネギ君、大丈夫かい？鬼は還したけど、怪我はどうだい？」

「うん。大丈夫、さつき治癒の魔法かけたからもう治ったよ。」

「全く、少しは考えてくれ、魔法先生が危ないのはわかるけどね、魔法の射手でも撃てばいいのに、わざわざ、間に入って庇って怪我を負うなんて、間抜けもいいところだよ。」

フエイトはやれやれといった風にため息をつく。 「ムッ、仕方ないじゃんか気づいたら体が勝手に動いてたんだからさ。」

「ネギ君。君は相変わらず頭はいいのにバカだね、戦況判断が随分ヘタクソになったじゃないか、一度ハイデライトウォーカーに、修行をつけ直してもらったらどうだい？」

その言葉を聞き、ネギは先ほどのイラつきもすっかり消え、「マスター・・・修行・・・オシオキ・・・ヤダ・・・オシオキコワイ オシオキコワイ・・・ますたーコワイコワイコワイコワイコワイコワイ・・・」

といった具合に壊れてしまった。

フェイトはもう一度やれやれとため息をつき、壊れてしまったネギを正気に戻し、負傷したガンドルを連れて、学園長室に報告に向かった。

~~~~~現在の設定~~~~~

フェイトが学園に居るのは5年前の魔法世界の事件でネギに友達になって欲しいと言われ、却下したあと、ネギにガチバトルで負け、グランドグレートマスターキーを奪われ、コードオブザライフメイカーの野望が崩れ、勝者の権利を使われ友達になったため。

その後流石に信用がないため、マギステルマギとして行動（実際にはフェイトが趣味でやっていたことと大差無い）し信用を得て学園に来たのが1年前の事である。

ちなみにアラアルバとは和解しており、学園長とタカミチと仲が良いい、だが魔法先生・生徒とは仲が悪いのだが、佐倉愛衣などのガンドルや高音のように強く正義正義と言わないような人には、最近になってからだか認識を改められている。フェイトはネギ同様学園では、先生をしており、教科は倫理である。

またネギ同様人気がありネギとフェイトは二人の子ども先生として有名であり、学園女子生徒の8割がどちらか又は両方のファンクラブに入っている。

ついでにネギとフェイトの容姿は5年前に年齢詐称薬を使った姿とほぼ同じである。

さらに調等のフェイトの従者達は、魔法世界の魔法学術国家都市アリアドネーで委員長やコレット達と仲良く戦乙女騎士最優秀候補として学んでいます。

## プロローグ1（後書き）

今回はゼロ魔のゼロの字も出てきませんでしたが次話には召喚される  
ところまでいくつもりです。駄文ですがよろしくお願いいたします。

## プロローグ2（前書き）

戦闘難しい。文才欲しい。

## プロローグ2

side introduce

翌日。フェイトはいつも通り5時と早くに起床し、身形を整え授業に必要なものを確認して家を出る。家と言っても教員寮なのだが、そして朝早くから開いている喫茶店に入り、朝食を摂る。もちろん日に七杯は飲む珈琲もだ。ちなみに珈琲と紅茶のどちらがより良い飲み物かでネギと皮肉や珈琲の有用性について口論になったことは少なくない、周りの人は、いつも冷静なフェイトがムキになっているのが可愛いと言っていたが、アラアルバの人達はいつ喧嘩になるかひやひやしていた。事実、エヴァの別荘では周りが止められない程の喧嘩になったこともあり、ネギはマギアエレベア、フェイトは冥府の石柱や障壁突破石の槍など致死性の高い物ばかり使っていたのでアラアルバにとって二人の珈琲・紅茶議論は鬼門である。それはさておきフェイトは朝食を終えると職員室までまっすぐ向かい、授業まで書類整理・処理を珈琲を飲みつつ行い、授業になれば真面目で淡々とだが、生徒の興味を引くような話題を織り込んだ、真面目だけど面白い授業を行っている。そんな先生の模範みたいな彼は今晚ネギと見回りをする事になっている。

どうやらこの頃の鬼達はそこそ強力で魔法先生も今までツーマンセルだったのだがいまではスリーマンセルになっている。(まあ、アラアルバは補助以外の人は1人なのだが。)

昨夜ネギが負傷したのも鬼が持っていた武器に障壁突破がかけあったからからである。あと疑問に思ったかも知れないがフェイトがネギと組んでいるのは、もしフェイトが裏切っても取り抑えられる実力を持った人材がネギしかいないからである。平たく言えばネギは監視である。が、アラアルバの中にそれを気にしている人はいない。全ては正義正義と五月蠅い一部の魔法先生・生徒への配慮で、

実際神多羅木等は気にしていない。

introduce out

フェイトside

ネギ君とは教員寮の前で待ち合わせをしている。待ち合わせ時間は10時ちょうど。今は9時40分。ネギ君は今日残業も何も無いはずだから、多分9時50分位に・・・って言ってる間に来たね。

「フェイト、ごめん待った？」

「いや、少し早めに来ただけだからね、そこまでは待っていないよ。」

「じゃあ少し早いけど行こう。」

「わかった。」

僕はこの時早く行くことを後になって、悔いるとは思わなかったよ。いや想像の範疇外だったから仕方ないんだけど。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ふー。なんで僕とネギ君はこんなのに会ってるんだろう、しかし、関西呪術協会の反対派も必死だね。わざわざ上級の鬼を50体も出すなんて、これアラアルバ以外の魔法先生・生徒じゃあ話にすらなら無いね。

まあ、僕たちには関係無いけれど。

「フェイト！行くよ！！」　ラス・テル・マ・スキル・マギステル　契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立

つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻『千の雷』　・固定・  
掌握・・・術式兵装　『雷天大壮』！！」ネギ君もそれなりに本気  
だね。まあマギアエレベアまで使ってるから僕は補助でもするべき  
かな。

「よし、ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト　小さき王  
八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ　その光我が手に宿し　災いなる眼差  
して射よ　石化の邪眼！！」

フェイトの指先から閃光が放たれ、鬼達が当たった場所から徐々に  
石化しはじめる。

だが鬼達は、

「兄ちゃん、舐めんなや、こんくらいレジスト出来るわ！」

と余裕綽々と言った風に笑う。だが、フェイトは淡々と全く焦らず  
に言う。

「それはそうさ、君たちは一応上級の鬼だからね、そんなことは重  
々承知さ。だから、僕がしたのはただの補助さ。」

フェイトはさも当然といった風だ。それを理解出来ず鬼達は首を捻  
る。

そこにフェイトは、

「だから、石化してれば砕きやすいだろ、ネギ君が。」

死刑宣告を下した。

瞬間。鬼達が知覚できない程の速さで、鬼達の間を雷が走った・・・

鬼達は全員雷に砕かれ還った。

フェイトはネギに声をかける。

「ネギ君。

お疲れさ・・・。」

フェイトはいきなり現れた鏡のような魔法陣に引きずり込まれ、フ  
ェイト・アーウェルンクスは旧世界・魔法世界両方から姿を消した。

ネギside

『雷天大壮』で一氣に片付けようとしたときに、閃光が放たれた。これはフェイトの『石化の邪眼』だ。

そして鬼達を見ると、皆腹から、胸辺りが石化し始めていた。流石フェイト。いつも効率の良い補助をするね。フェイトのしたい事がわかった僕は、フェイトの期待通り、石化している部分を片っ端から砕いた。

そして周りに鬼がいないことを確かめてから、『雷天大壮』を解きフェイトに振り向いた、すると、  
「ネギ君。お疲れさ……。」

光の鏡に消えていくフェイトの姿が見えた。

「フェイトッ！！！」

叫んで手を伸ばすが、届かずに虚しく空を切った……

フェイトside

光の鏡に引きずり込まれて、気がついた時目に入って来た光景は、如何にも魔法使いですといったような服装をした人達と、広大な草原と青空だった。

そこにいる人達は、「平民を召喚した！？」だの、「流石ゼロのルイズ。」などと言っていて、その中でも、一番近くにいた鮮やかなピンクの髪の少女が近付いてきて、

「あんだ、誰？」

と不遜に問うて来た。

## プロローグ2（後書き）

やっとゼロ魔の世界に入って行きます。ギリギリでルイズが出てきました。次話から本格的に、ゼロ魔の世界です。と行きたいですが、フェイトが消えた後のネギ達の行動を書きますのでちょっとだけネギま！の世界に戻ります。gdgdな駄文になりそうですが、長い目で見てください。

## 戸惑うネギワールド（前書き）

すいません。今回はフェイトが消えた後のネギ達の話なので、ゼロ魔成分が全くないです。次話からはゼロ魔の話しばかりですので、ゼロ魔好きのかたすいません。

## 戸惑うネギワールド

~~~~ネギま！世界~~~~

side introduce

フェイトが突然消えたことをネギは学園長に報告しに来ていた。「学園長先生ッ！！！」

学園長はネギが荒々しく扉を開けて入って来たので、学園長は驚いたが、フェイトがいないことに気付き、最悪を想定してネギの報告を聞いた。

「フォツフォツフォツ、どうしたのかね、ネギ君。」「学園長先生、フェイトがフェイトが、フェイトが消えました！！」

学園長はフェイトが裏切り、姿を消したのかと思ったが、それにし
てはネギ君に心配の色が濃いと気付き、「・・・詳しく話を聞こう
かの。」

そういつていた。

.....

.....

.....

.....

「なるほどのう。」

ネギの報告にあったのは、上級の鬼達を倒したこと、フェイトが全く違う魔法体系の魔法陣に引きずり込まれたこと、フェイトも突然のことに驚いていたことだった。

学園長は少し考え、

「のう、ネギ君、フェイト君は確かアラアルバのバッジを持ってい

たのう。」

「はい。フェイトが学園に来た時渡しましたから。それに、フェイトは一部の魔法先生が五月蠅いからと、いつも持ち歩いていました。」

「ならば、彼女らを呼ぶかの。」

学園長は携帯を取り出し、エヴァにかけた。

「おー、エヴァンジェリンちょっといいかのう。」

「なんだクソジジイ、私は忙しいんだぞ、大した用じゃなかったら、その奇っ怪な頭を通常になるまで凹ますぞ。」

「いや、それがな………というわけなのじゃ。」

「何？あのガキがかなるほど、私は茶々丸と行けば良いわけだな？」

「相変わらず察しがいいのう、そうじゃ、そうしてくれ。後の子らは、わしが呼ぶでのう。なるべく早く来てくれ。」

・
・
・
・
・
・

「あのフェイトが消えたって本当何ですかッ学園長先生！！！」

「本当なん？お爺ちゃん。」

「本当何です

か？学園長先生。」

「にわかには、信じがたいでござるなー。あのフェイト殿が。」

「フェイトが消えるとは信じがたいアルね。」

「あわわわわ。大変ですー。」

「あのフェイトさんがですか、驚きですね。」

「あのフェイトちゃんがねー、そんなことってあるんだ。意外だなー、完璧超人って感じなのに。」

「確かに意外だね、フェイトって、ネギ君と同クラスなんでしょ？」

「ああ、あのラカンのおっさんが警戒するぐらいだからな、かなり

強いはずだ。」

「意外です。」

「ええ、確かに強さはネギ先生クラスですし、普段の警戒もアラアルバの中で一番高いですから、かなり意外でしょう。」

「ふん、所詮はガキだったか、それとも、その魔方陣の気配が感じとれぬようになっていたかのどちらかだろうがな。」

「後者だと思いますよ師匠、あの魔方陣は魔法体系が全く違ったからか発動の探知が出来ませんでしたから。」

上から明日奈、このか、刹那、楓、古、のどか、ゆえ、パル、朝倉、千雨、さよ、茶々丸、エヴァ、ネギである。

「それでじゃ、フェイト君が消えた。というところから空間転移系の魔法だと考えたのじゃ、では探索頼むぞ。茶々丸君。」

「はい。改良されたアラアルバマジは衛星を介して地球上又は魔法世界上にいれば、探索可能です。それでは、
search

start・・・そんなバカなことは・・・。」

茶々丸は探索結果に驚愕している。

「ど、どうしたんですか？茶々丸さん。」ネギは驚いている茶々丸に心配そうに問いかける。

「すいません。ネギ先生。探索結果は・・・unknown。フェイトさんは地球上はおろか、魔法世界上にも存在していません。」

「な、なんですって!？」茶々丸の回答に青ざめるネギ。

「う、嘘ッ、ていうか、魔法世界に衛星ないから魔法世界は探しようないじゃん。」

余りの結果に無意識に、抜け道を示そうとする明日奈。

「いいえ、明日奈さん。魔法世界には超が転送してきた大規模攻撃型衛星が存在します。ですから魔法世界も探知可能です。」

抜け道もないと否定する茶々丸。

「で、でしたら魔法空間はどうなのですか？そこなら衛星でも探査不可では？」更なる抜け道を示すゆえだが、

「いえ、その可能性も考え先程同時探査いたしました、魔法空間

の存在又は作成の際に出来る空間の歪みが探索時、発見されなかったため、その可能性も皆無です。」

茶々丸が優秀なために即座に否定される。

「じゃ、・・・じゃあ、宇宙とかに放り出されて・・・？」

のどかが最悪の結果を示そうとしたとき、

「むっ・・・！！・・・これは・・・。」

茶々丸が何かに反応する。「どうしたんですか！？茶々丸さん。」

「なるほど、あなたはこの時の事も予想して・・・。」

一人納得している茶々丸に、全員が首を捻っている。と、

「皆さん。安心してください。フェイトさんは無事だそうです。」

いきなり無事を告げられた。

「よ、良かったー。フェイトは無事なんですネ。それで、フェイトは今何処に？」

みんなの気持ちを代弁するネギ。だが返答は。

「それが・・・詳しくは解りません。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へっっ・・・？」

「」

みんなの声がハモリ、一同フリーズする。

「じゃ、じゃあなんで無事って分かるのよ！？」

明日奈が尤もなことを言い、みんなもそれに頷いている。だが、

「馬鹿か貴様等、先程茶々丸が言っていただろう。あなたはこの時の事も予想して・・・と、この事から、茶々丸への情報提供者は一人しか考えられまい。」

「まさかつ！超さんですか！？」

「正解だ。ぼーや。茶々丸メッセージをそのまま伝えてやれ。」

「分かりましたマスター。音声設定、超 鈴音。メッセージ再生開始。フツ、久しぶりネ、ネギ坊主。超 鈴音だヨ。これ

をネギ坊主が聞いているということはフェイト・アーウェルンクスが消えたということネ。ん？どうやってこのメッセージを送ったか？それは私が転送った衛星に探索指令が入ったら送る設定になって

戸惑うネギワールド（後書き）

まさかの超りんでした。

いやだってですね。ハルケギニアのこと教えようと思ったら、これしか出てきませんでしたから。えっ？才能無い？すいません、すいません。ああ、石投げないで、あと、アラアルババッジとか、魔法空間と衛星の設定がご都合主義になってますた。文才無い？すいません、なんか謝ってばっかになってすいません あっあとこれから期末が始まるので、更新は気分次第になりそうです。期末終わるまでですが、書き貯めしてませんので。それではまたよろしくお願いいたします。

召喚 出てきたのは白髪美青年！！（前書き）

短くてすいません。試験期間中ということもあるのですが、すいません。さらに全く進んでいませんね。次話ではそれなりに進めたいです。というか進めます。あと、オリジナル設定は説明が入っていますが、既存の設定、（ハルケギニアの事など）は少し省略してもよいのでしょうか？教えていただけるとありがたいです。では本編をどうぞ！！

召喚 出てきたのは白髪美青年！！

ゼロの使い魔

ルイズ side

さつきから私の心臓が私のじゃなくなつたみたいに鳴り続けている。
落ち着いて、落ち着いて、私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。偉大なヴァリエール公爵家の三女なのよ。だから大丈夫、大丈夫。さつきから失敗し続けて周りが「成功しないな、流石ゼロ。」とか、「ケホッ、ケホッあいつには無理だから止めさせるー！！砂埃が舞うじゃないか。」とか、「あらあら、留年決定かしらゼロは。」・・・とか！ 落ち着けるかー！！

いいわ、絶対に次であいつらが羨むような使い魔を召喚して見せるわ、それで見返してやるのよ！

「わが名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。世界の何処かに存在する。美しく、強い者よ、私の使い魔として召喚されなさいっ！！！」

ドッカーン！！

よしっ！！、確かな手応えがあつたわ。いつもより爆発も大きいし、周りがうるさいけど砂煙の中にはちゃんと人影が・・・って、あれ？人影って？まさか私、人を召喚しちゃった？

う、嘘よ！嘘！！そんなはずないわ！！！！けど、砂埃がはれてそこにいたのは、白髪の青年だった。ありえない。人間を召喚するなんて、周りも「平民を召喚したっ！？」、「ルイズの奴使えない平民を召喚するなんて、流石ゼロ！！」とか言ってるし、と、とりあえずアイツに確認しないと、

「あんた、誰？」

side out

フエイトside

目の前にいるピンクの髪の持ち主は僕のことを知らないみたいだ。おかしい、あのタイミングで転移させられたから、大方敵の罠かと思っただけだ。・・・名乗ってみるかな、魔法関係者なら僕の名前を知らないはずがないし。

《実は5年前の事件の犯人として魔法関係者にはかなり名前を知られている。》

「・・・フエイト・アーウェルックス。」

「えっ!？」

驚かれた。じゃあ彼女は敵ではなく、此处は魔法世界かな?・・・いや。敵ではないと決めつけるには早計だね。一応警戒はしておこう。そんなことを考えていると、

「家名があるっ

てことは、貴族なの!?!？」

検討違いなことで驚かれた。・・・貴族?あり得ない、旧世界はもちろんのこと魔法世界にも王族や議員はいても貴族はいない。そんな制度は大昔に撤廃されたからね。

そして、ファミリーネームがあるだけで貴族扱い。

あり得ない。なら考えられることは・・・嫌だね、絶対に信じたくない候補が2つ位でできたよ。

1つ目。時間跳躍をして、過去の時代に移動した。

ふざけるようだけどネギ君達から超鈴音という人物について聞いているから、あり得ないことではない。

そして2つ目。こっちの方が信じたくない。・・・此处が異世界である可能性。根拠はいくつかある。

まず1つ目。僕の名前を知らない。魔法世界で生きる人間なら知らないはずがない。だって僕の当時の目的、世界中の人々の抹殺だからね、事情を知らない人から見たら。今ではハイデライトウォーカーより悪人としての知名度が高いからね、彼女の代わりになまはげ扱いらしいし、彼女は笑ってたけど・・・話が逸れた。

2つ目。ファミリーネームがあるだけで貴族に間違われるような制度が在るということ。というか、そも、貴族がいるということだ。この時点で、最低でも僕がいた時代の世界ではない。3つ目。僕を転移。いや周りの人々の言葉を信じるなら、召喚した魔方阵の起動を僕もネギ君も関知出来なかったこと。これでも僕とネギ君は世界最強クラスの力の持ち主だ。並大抵の術者の力量ではそんなことは不可能。ならば可能性は1つ、僕やネギ君が全く知らない魔法・術式体系の魔法である場合。それならば関知出来ないのも当然。

今まで感じたことの無い気配に加え、僕の真後ろに出現。戦闘直後の注意しても起こる気の緩み。術式自体に施されている認識阻害、気配遮断。これだけ材料が揃っているならあり得ることだね。

こんな発想ができる自分に嫌になる。こんなことを考えられるようになったのはハルナさんに、漫画について一から叩き込まれたからだ。

状況判断の役にたったとして喜ぶべきか、滅茶苦茶な考えが浮かぶようになったと怒り哀しむべきか。

まあ、考え事はもういい、とりあえず情報を集めよう。まず目の前のピンク髪の子に聞くか。話しも途中だし。

《ここまで思考時間約10秒。はつきり。フェイト、恐ろしい子つ！！である。》

「いや。貴族ではないよ。それで君は？」

ルイズ side

なーんだ。貴族じゃないのね。家名持つてるのに。変ね。まあいいわ、問題なのは役にたたない平民無勢が私の使い魔として召喚されちゃったことよ！！

とりあえず先生にやり直しを要求したいわ。公爵家三女の高貴な私の使い魔が平民なんて許されないわ！！

「コルベール先生。あの、もう一度召喚させてください。」

side out

side コルベール

今日は使い魔召喚の儀式です。皆さんちゃんと召喚出来てますね。大変よろしい。まあそれが普通なのですが。最後に問題のミス・ヴァリエールですね。先程から何度も失敗しています。困りましたね、失敗もなのですが、いちいち爆発が起きるので砂埃がすごい舞いますし。・・・ああ今回は一際大きい爆発ですね。

おや？どうやら召喚出来たみたい・・・つつ！！！？なんですか！？このあり得ない程に巨大な魔力は！？しかもこれほどの魔力を持つてるのに、幻獣ではなく人ですか！！・・・あり得ない。この魔力はスクエアクラスのメイジ100人以上は確実にあります！。しかもその人に向かって、ミス・ヴァリエールが何か話しかけています。いけない。彼の魔力に敵意はありませんが、警戒の色はあります。下手に刺激してしまったらここにいる全員が殺害されることもあり得ます。とりあえず彼らのもとに行かなくては・・・

「コルベール先生。あの、もう一度召喚させてください。」
・・・とりあえず。彼に事情の説明と説得。彼女への説得をしなく
てはいけませんね。

召喚 出てきたのは白髪美青年！！（後書き）

フェイト君頭良すぎですね。すいません。なにぶんパルに教え込まれている上に頭良いですし、フェイト君ならこの位推測しそうですねですもん。

という、駄作者の独断と偏見により、フェイト君は異世界と、感づいてしまいました。すいません。こんな駄作者ですが、どうかよろしくお願いいたします。

コントラクトサーヴァント？ ふんっ。誰が？（前書き）

ようやく期末試験が終わりました。

これから更新速度は、少しはマシになる予定ですが、リアルが少し忙しくなるので、最初の更新速度は難しいかと思っています。

前回進めるとかいつて今回ようやくコントラクトサーヴァントのイベント終わったぐらいですね……。本当にすいませんでした。

m () m

コントラクトサーヴァント？ ふんっ。誰が？

フエイトside

僕の事は無視か、大物なのか？魔力は多いけど僕程じゃないし・・・ただ単に、僕の実力も分からないほど未熟なのか・・・まあ後者だろうね。

見たところまだ幼いし、動きも隙だらけ、仕方ないんだろうね。しかし、無視をしないで欲しいな。僕は今、情報が欲しいからね、無視されるのが一番困る。

どうしたものか。・・・ん？こっちに近づいてきてる人がいるな。

彼は・・・頭が寂しいね、あと、明らかに場数を踏んでる。多分何人か、いや最低でも100は殺してる。それぐらいに隙がない。

・・・まあ一般人からしたらだけど。何か焦ってるな、僕の実力を見抜いたか？

・・・いや、それはない。多分僕の異常な程の魔力量を感じ取れたんだろうね。だから焦ってる。

さっきからピンク髪の子が無視してくれるから、周りでガヤガヤとうるさい話し声も貴重な情報だ。

話し声によると。

「ゼロのルイズが役にたたない、平民を召喚したぞ。」

や、

「使い魔が平民だなんて、ゼロのルイズにはお似合いね。」
などが多い。

この話からすると、使い魔召喚でもしていたのだろう。確かに、周

りの人達はカエルやら梟やらさらにはバクベアーやバシリスクなどの幻獣までいる。

あと分かるのは、このピンク髪の子の名前がルイズであるだろうってこと。

その前に付いている『ゼロ』というのは、渾名だろう。

今、推測できるのはこの程度。あとは話を聞かなくちゃあわからない。

さあ、頭が寂しい彼が来たみたいだし、話を聞こう。

「ミスタ。聞きたいことがあります。」

フエイトside out

コルベールside

「ミスタ。聞きたいことがあります。」

召喚された白髪の青年が会話を求めてきた。よかった。いきなり暴れだすようなことはないみたいです。会話が出来るのならば、まだ交渉の余地があります。彼程の力を持った人が契約に応じてくれるかは分かりませんが、最悪の事態は避けられるかもしれません。とにかく、話を聞きましょう。

「ええ、ミスタ。どんな話ですか？」

コルベールside out

フエイトside

「はい。まず、あなたには僕の力がわかっていますよね？」

「ええ、わかってますよ。だからこそ、話に応じているのです。」

つまり、僕が弱かったら話すらなく、強引に押し進めるつもりだったのか。 「ではまず、此処は何処でしょうか？」

「此処はトリステイン王国の、トリステイン魔法学院ですが、それがなにか？」

「……これは異世界決定かな……？でも一応他の国のことも聞こう。」

「……なるほど。では周辺諸国の名前を教えてください。」

「ここハルケギニア大陸ですか？ 分かりました。まずはここ、トリステイン王国。ゲルマニア帝国。ガリア王国。アルビオン王国。そしてロマリア帝国ですね。」

「……駄目だね。これは異世界決定だね。似たような名前の国は過去の地球にもあったけど、ハルケギニア大陸なんて名前の大陸はなかったし。」

「……仕方ない。ここは彼らの最高責任者に事情説明をしないと駄目だね。」

「では、あなた方の最高責任者に会わせてください。その方に事情を説明いたしますので。」

それしかない。そう思って言った時。

「待ちなさいよ！！！」今まで視界に入れてなかったピンク髪の子が怒鳴った。

フェイトside out

ルイズ
何なのこのスカ

した白頭！！さっきから目の前にいる私を無視して！！

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。誇り高き公爵家の三女なのよ！！

そんな私を貴族でもない平民がましてや、使い魔として召喚されたくせに無視するなんて、信じられない！！！！

しかもいきなり最高責任者に会わせるだなんてあんた何様なのよー！！

もう許さない。こうなったら、完全に使い魔にして、言うこと聞かせてやるわ。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ。」

呪文を詠唱したら、コルベール先生がなにか騒いでいたけど。なによ。ただの平民じゃない。そんなにならなくてもいいでしょう。そして、私が白頭にキスをしようとして……………避けられた。なんでよ！！？

貴族とキスなんて絶対に出来ないのに、それを避けるですって！！？なに避けてんのよ！！

そう叫ぼうとした声が固まった。

……いや、意識が固まった…………。

白髪の青年の、目が。

私を射抜いて、凍りつかせた。

ルイズside out

フェイトside

今の魔法。

完全ではなかったけど、洗脳の効果があった……。詠唱にあった、『使い魔となせ。』という言葉。

なるほど。使い魔が齒向かうようでは、使い魔とは言えない。

だからこそ、洗脳。

主人に従順。そうでなくとも、絶対に裏切らない。そうさせないための洗脳か。確かに普通の使い魔なら、してもおかしくないし、むしろ、しないと駄目だけど……。

人間にすることじゃあないね……。

さつきはいきなりだったからつい反射で少し殺気を飛ばしちゃったから、ピンク髪の子が固まってるね。

……。まあいい。

確かに、魔法学院の生徒に殺気を飛ばしたのは、まずいし、悪印象だけ。

いきなり使い魔にしようとした、学院側に非があるからいいか。

「では、ミスタ。参りましょうか。」

フェイトside out

コルベールside

やはり、彼は危険です。

使い魔にされるのが嫌なのは分かりますし、避けるのも分かります。ですが、彼は反射で避けるだけでなく、同時に殺気まで飛ばしていました。

……あの程度が、本気ではないでしょうが、反射でそこまでするほど、戦いには慣れているのでしょう。

……嫌ですね。彼は青年に見えるが、私から見ればまだ子供。まだ、味方でも親しくもないというのに……死に慣れて欲しくない。

……所詮、私のエゴですね。彼からすれば余計なお節介でしょうね。

……駄目ですね。

今は、感傷的になっている場合ではありません。早く指示を出さなくては。

「では、皆さん。これからの時間は使い魔との親交を深める時間とするので、授業はありません。では、皆さん。解散してください。」

「では、ミスタと、ミス・ヴァリエール。学院長室に向かいましょう。」

コルベールsideout

sideintroduce

「ふむ。なるほど。そちらの事情はわかった。」

ここは、学院長室。

使い魔召喚を遠見の魔法ですで見えていたオールド・オスマンは、部屋にやってきた。フェイトの話聞き、納得はしたが、困惑し、参っていた。

フェイトからの要求は、今すぐもとの場所に還すること。

だが、サモン・サーヴァントは片道のみ魔法。

彼が居た場所はおるか、彼の世界に還すことすら不可能なのだ。

さらに、フェイトが強すぎるのが問題であった。

フェイトは強すぎる。

それこそ国の全戦力を使っても、まだフェイトの方に分があった。

そんな規格外も良いところの強さを持つ、フェイトに君を還すことは出来ないと言ひ難かった。

だが、それも。

「その、反応から察するに、僕を今すぐ還すことは出来ないみたいだね。」

フェイトが優秀過ぎるゆえすぐに、見抜かれてしまった。

オスマンは慌てた。

フェイトが怒って暴れたらどうしようもないからだ。だが、オスマンの危惧も杞憂に過ぎず、

フェイトは一つ大きくため息をつくと、

「慌てなくてもいいです。安心してください。僕は暴れるつもりもありませんので。」

疲れたように、言った。

その様子を見て、オスマンはフェイトの言葉に嘘がないのを感じ取った。

何故なら、フェイトの態度に疲れと諦めが滲んできているからである。

フェイトは、こう思っていた。帰ることの出来る可能性はほとんどゼロであるだろう、と。

フェイトが帰るのには、最低でも、世界を渡る力が要る。

そんな力は強大すぎてまずありえない。特にこの世界では。

ここにいるメイジの最高クラスの一人であろうオールド・オスマンの實力は、フェイトの目算であつたが、おそらく、フェイトの世界のランクでA程度。

マギアエレベア修得前のネギより、弱いだろう。

だから、フェイトは帰ることを半ば諦めている。が、諦めきる事はできない。

だから、オスマンに要求した。

「その代わりに、要求があります。まず一つ目、僕にまともな衣食住を提供する事。二つ目、僕が帰る方法を探すこと。そして、三つ目、僕を形式だけの使い魔にする事。最低でもこの三つは保証して欲しいね。」

オールド・オスマンは安堵していた。

要求の衣食住はたいした問題ではないし、帰る方法の探索も、見つかるかどうかは分からないが、探索だけなら出来る。

最後のは、むしろ願ってもないことだった。

おそらく、エルフ並みか、それ以上の力を持った者を形式だけが、ミス・ヴァリエールの使い魔という形で抑えておけるからだ。

「ふむ。わかった。衣食住の保証は元々使い魔に保証される物じゃし、帰るための方法の探索もやろう。最後の形式だけの使い魔契約容認しよう。ミス・ヴァリエールも、コンタラクトサーヴァントを

しなくとも進級を学院長の名において容認する。」

オスマンはフェイトの顔色を伺いつつ、これでよいかな？ と確認する。

「ええ、十分です。先の要求が守られる限り、僕は彼女の使い魔。ということ。」

フェイトもそれで構わないと首を縦に振る。

オスマンはルイズにも構わないか？ と確認し、ルイズはさっきのフェイトの殺気がまだ効いているのか、黙ってこくこくと頷いた。

コントラクトサーヴァント？ ふんっ。誰が？（後書き）

強さの方は作者の独断と偏見と目分量で出来ていますので、読者の方の意見と違っていただけめんなさい。

異なる物（前書き）

m (— —) m

すいませんでしたー！。

あり得ぬ程更新が遅れ、しかも文量が、少ない。
なにやってたかですか？

高校の課題とハリポタの見直しとこの頃リリカルな世界にはまった
事です。

すいません。読者の皆さんには大変失礼しました。

これからはもっと改善するつm「もう、遅いよ。」

ってフェイト君！？

僕の前書きはそういうコーナーじゃn「黙れ。」はい！！

「読者への迷惑と僕への迷惑を考慮してお仕置きするから黙ってて。」

」

今僕を強調したね！！？

「・・・ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト 『永久・

・・・」

ちよっ！！！！永久石化！！！！！！！！

死ぬっ死ぬ助け・・・

「・・・石化」

パチンツ・・・

「駄（墮）作者には制裁を、ああ、大丈夫です。一応作者ですから

次回までには治ってますから。・・・多分、おそらく、きっと。こんな、駄作者だけど、出来れば見捨ててやらないでね。お願いします。」

異なる物

ルイズside

変なことになったわ。

れたとかいってるし。

し！

し！！

なのよー！！！！

「あんた一体何なのー！！」

ルイズside out

フェイトside

僕を召喚したピンク髪の子の部屋に着いた。

ようやく休める。

さっきまで此処の最高責任者やコルベールとか言う教師に自分の事を話したり、ハルケギニアについて聞いたりしたから疲れた。

そして、何より問題なのが……。
ルイズ。

僕の形式だけの主人になった僕をこんな厄介事に巻き

込んだピンク髪の女の子。

彼女への感想を言うならこれに尽きる。

『権力という質の悪い玩具を手に入れた愚かな餓鬼』

何故なら、まず彼女は、僕の力に全く気づいていない。

本来僕程レベルの違う者に会ったらすぐに気づくはずなのに気づいていない。

この時点で彼女はレベルが低い。

とはいえ、あの草原で僕の力がわかったのは二人しかいなかったけど。

一人はミスタ・コルベール。

そしてもう一人は、蒼い髪をした少女だから、この学院の生徒達は相当レベル

が低いんだろう。

だけど、僕を異世界から召喚したピンク髪の少女。

彼女は僕のレベルに気づく位して欲しい

ね。

そして、このルイズって子は、人間とし

て駄目だ。

彼女は自分を偉大なる公爵家三女と言

っていた。

公爵家ということは、王族

や一部の重鎮以外の貴族より位が高い。

だから彼女は事あるごとに、

『私は公爵家三女なのよ』とか、

『平民は貴族の言うこと聞いてればいいのよ』とか、

『平民の幸せは貴族に仕えることなのよ』

などと真面目に言ってるからね。

ああ、そんなことを真面目に言っぐらい此処の貴族の教育は酷いのか。

集めたような世界。

正に中世ヨーロッパの腐った貴族だけを

・・・ヘドが出るね。

まあ、そんなこともあつて今の主人の評

価は最悪。

一応使い魔になったからに

は少しは面倒みてあげてもいいけど。

あまり気は進まないね。

そんなことを考えていると。

「あんだ一体何なのよ!!」

さっきまで黙っていたピンク髪の少女が僕に叫んできた。

「何を言っているんだい？ルイズ・フランソワーズ。僕の説明なら学院長室で話したけど。」

と、既に知っている筈の事を聞いてくる彼女に、何を言っているんだ？

・・・って返したら。

「あんだが学院長室で話した、違う世界、ましてや貴族のいない世界から来た。　なんて、信じられるわけないでしょ!!」

そう叫ばれた。

「ふう・・・、信じられない、ね。それはこっちのセリフだよ。ルイズ・フランソワーズ。」

「なんでよ!？」

喧しい。

「いちいち叫ばないでくれ、喧しい。第一今は夜だ。周りの部屋の人に迷惑だろう。」

「なっ！！？ あ、あんた私はあんたのご主人様なのよ。なのに喧しいですって！！ ふざけんじゃないわよ！！！」

・・・ああ、まさかここまで駄目だったとは。

予測はしてたけど、こんなのが主人とは・・・。

まあいい。とりあえずこの愚か者に立場を教えてあげようか。

「ふざける？ 馬鹿を言うなよ、ルイズ・フランソワーズ。まず君は自分が主人だから従えと言っているが、僕は形式で使い魔をしているだけで、君を主人だなどとは思っていない。」

「なっ！！？」

「それと、喧しいのは厳然たる事実だ。僕は注意をしているだけであって、君の怒りはただの逆ギレだ。君みたいな子供が主人とは、全く嫌気が差すね。」

「な、なななな、なんですってー！！！！あんた「それが喧しいと言っているんだ。ルイズ・フランソワーズ。もう君とのやり取りは疲れたよ。僕はもう寝る。で、僕は何処で寝ればいい？」

「ふんっ。そこよ。」

指を指された方を見ると床に藁が敷いてあった。

・・・嘗めているのか？僕は条件にまともな衣食住を要求したと
いうのに、床に藁とは。

まあいい。また揉めるのは正直面倒。
だからといって、床に寝る気はさらさら無いけど。

「君には、ほんとと呆れるね。生憎僕には床で寝る趣味は無いから、
椅子で眠る事にしよう。」

そう言つて、僕は椅子に腰かけた。

戦場だと野宿が基本だったから、ある程度なら悪条件下でも寝れる。

そして、腰かけた時に不意に窓の外を見た。

僕は一瞬息が止まった。

僕は窓からある一点を凝視している。

ありえない、だけど此処は異世界。誰かの言葉の通り、ありえない
事はあるのではないだろう。

視線の先に在るのは満月。丸い、丸い二つ（・・・）の
双月だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1412m/>

ゼロの使い魔は3 番目

2010年10月31日01時31分発行